

## 梨本宮伊都子妃収集絵葉書

### に関する予備的考察

山田 俊幸  
安田 政彦

はじめに

梨本宮伊都子妃収集の絵葉書と伊都子妃殿下については、増野恵子氏の簡単な紹介がある（「梨本宮伊都子」、『彷彿月刊』二四八号、彷彿舎、二〇〇六年五月）。その一部は、二〇〇五年十月に逋信博物館で開催された『秘蔵・青梅きもの博物館 梨本宮妃殿下コレクション 日仏絵はがきの語る100年前』で公開されたが、「歴史を映す優れた同時代資料として、今後コレクションの調査と研究が進むことが望まれる」との増野氏の指摘がある。今回、山田俊幸教授（絵ハガキ学会会長）とともに披見する機会を得たが、日露戦争関係、フランス風俗、災害、風景等の様々な絵葉書とともに、来信絵葉書なども保存されており、まさに、「歴史を映す優れた同時代資料」であることを実感した。今後、山田教授を中心に本格的な調査研究を進めるにあたり、本稿ではこれまでの梨

本宮伊都子妃収集絵葉書に関する知見とともに、若干の予備的考察を行いたい。

#### 1 梨本宮と伊都子妃について

戦前、秩父宮などの直宮（天皇の子や兄弟姉妹）を除いて、十五の宮家があった。すなわち、朝香・有栖川・華頂・桂・賀陽・閑院・北白川・久邇・小松・竹田・梨本・東久邇・東伏見・伏見・山階の各宮家である。

旧皇族梨本宮家は明治三年（一八七〇）に、伏見宮第十代貞敬親王の王子、守脩親王により創設された。

なお、伏見宮家は南北朝の時代に北朝第三代天皇である崇光帝の第一王子・栄仁親王からはじまる歴史のある宮家である。伏見宮は貞敬親王の第一王子・邦家親王に継承される。その弟・守脩親王は文政二年（一八一九）誕生、天

保四年（一八三三）に親王宣下を受けて近江国大津の門跡寺院である円満院に入室して覚諄入道親王と称した。その二年後に梶井円融院を相続して昌仁入道親王と改名している。明治元年、還俗して梶井円融院にちなみ梶井宮守脩親王を名乗り、同三年梨本宮と改称した。同一四年に六三歳で薨去すると、明治の制度により一代皇族であったが、特に許されて山階宮晃親王第一王子、菊麿王が養子に迎えられて継承されたが、同十八年、山階宮に復籍したため、久邇宮朝彦親王第四王子、多田王が勅旨によって梨本宮家を継承。翌年、多田王は守正王と改名した。明治七年の生まれである。

梨本宮妃殿下伊都子は、佐賀藩主・十一代当主に当る直大侯爵、公家広橋胤保の五女・栄子との間に、明治十五年、ローマで誕生した。伊都子は「イタリアの都」に因む命名という。父直大は帰国後、元老院議員、式部長官、宮中顧問官等を歴任している。

明治三十三年、伊都子十九歳のとき、梨本宮守正王二十歳と結婚。二人の女子に恵まれたが、長女方子は、大正九年（一九二〇）に朝鮮王世子李垠と結婚し、政略結婚とも悲劇の王女とも言われた。次女規子は広橋家に嫁いだ。

伊都子妃殿下の活動は活発で、明治三十三年から日本赤

十字社に関わり、日露戦争時には皇族・華族婦女子とともに、慰問袋の作成や傷病兵の見舞いなどを積極的に行っている。

日露戦争後の明治三十九年、戦役前に渡仏していた梨本宮守正王が再びフランスの陸軍士官学校に留学する。留学を終えた同四十二年に伊都子妃殿下を招き欧州歴訪を行う。歴訪は西欧各王室との親善を目的とし、約半年間にわたってフランス・スペイン・モナコ・イタリア・オーストリア・ロシア・ドイツ・イギリス・デンマーク・オランダ・スイスを巡っている。皇室外交の始めといわれる。

その後、大正時代を経て昭和の時代に起こった、第二次世界大戦（太平洋戦争）の敗戦により、昭和二〇年（一九四五）当時、陸軍元帥であった梨本宮守正王は皇室で唯一の戦犯容疑で巣鴨プリズンに収監された。翌年に釈放されたものの、同二二年臣籍降下、皇室離脱という処遇となる。

一般人とされた梨本宮守正王・伊都子妃殿下は、皇室費打ち切りにより、本邸の切り売り、財産売却等で生計を立てざるを得ず、同二十六年に、七八歳で梨本守正が逝去。

その後、伊都子は一市民として生活し、同五十一年九五歳の長寿を全うした（以上、『国史大辞典』吉川弘文館。梨本宮伊都子『三代の天皇と私』、講談社、一九七五年。小田部雄次『梨本宮伊都子

妃の日記』、小学館、一九九一年。『秘蔵・青梅きもの博物館 梨本宮妃殿下コレクション 日仏絵はがきの語る100年前』、青梅きもの博物館、二〇〇五年、等を参照）。

## 2 梨本宮伊都子妃収集絵葉書

梨本宮伊都子妃が収集した絵葉書は、先述したように、清水勲氏監修による『日仏絵はがきの語る100年前』において一部紹介されており、近年注目を集めている。

現在は、青梅きもの博物館（青梅市梅郷四一六二九）が管理しているが、そもそも、戦後に臣籍降下した旧梨本宮家が衣装等を保管維持することが困難になり、宮家ゆかりの衣装を青梅きもの博物館に寄贈したことにより、それに付随した伊都子妃関連の雑物のうちに、約五千点にもものぼる収集の絵葉書が何冊ものアルバムに整理にされてあったのである（青梅きもの博物館副館鈴木啓三氏談話）。近年、いろいろな研究者がこの絵葉書を調査しているが、未だに本格的な調査は行われていない。

『日仏絵はがきの語る100年前』展においても、展覧会の趣旨にそって日露戦争を描いた諷刺絵葉書を中心に展示されたのみで、それもすべてではない。梨本宮伊都子妃

収集絵葉書を一覧したところ、日露戦争を描いた諷刺絵葉書が多いものの、ほかにも風景絵葉書や災害絵葉書など種々雑多な絵葉書がきちんと整理されており、『梨本宮伊都子妃の日記』に一部紹介されているように、日露戦争従軍兵からの慰問袋に対する礼状葉書もあり、さらには、『来信』と題するアルバムには、一族からの来信絵葉書が整理されている。絵葉書の絵画面からの情報も豊富だが、来信文面は多くが時候の挨拶状とはいえ、娘たちははじめ一族との交渉の様子を知るうえで、これまでに公開された日記類では窺い得ない情報が詰まっているものと思われる。

## 3 日露戦争とフランス諷刺絵葉書

日清戦争による日本の勝利は、列強による中国分割を加速させた。一方、ロシアの南下政策はインドを取り囲む地域でイギリスの利害と対立し、さらにドイツやフランスの権益の拡張とも絡み合い、極東におけるロシアの膨張政策に対しては、イギリスのみでロシアを阻止する余裕が無く、『日英同盟』の締結によって対応する。一方、イギリスとフランスの歴史的な対立を背景にした、ロシアとフランスの結びつきは強く、ロシアは露仏協商を結んでいるフラン

スで起債した巨大な資金を使い、軍隊の整備とシベリア鉄道の建設に乗り出して極東の権益拡張を進めた。

こうした状況のなかで日露の対立は戦争に発展するのだが、日本も富国強兵による軍事支出が膨張し、多額の外債を発行なくしてはとも戦えるものではなかった。それは戦前の一般会計規模が二億〜三億円だったのに対して、戦争費用が約二十億円に上ったことからわかる。その起債には随分と苦しむのだが、高橋是清日銀副総裁が戦費調達のため英米を訪れ、ニューヨークのユダヤ系投資銀行「クーン・ローブ商会」を率いるジャコブ・シフの知遇を得て当時2億ドル（現在の1兆円）の公債を得る。シフは全世界に散ったユダヤ人やニューヨークのあらゆる銀行に日本の戦時国債を買うように呼びかけ、説得し、日本政府が日露戦争中に海外で発行した戦時国債のおよそ半分をユダヤ金融資本が引き受け、主にロックフェラー・スタンダード石油財閥が後押しする「ロックフェラー一般教育委員会」が出資したという。

ジャコブ・シフは強い影響力を持つユダヤ人の金融資本家で、その動機について、日本が好きで貸したのではない。同胞を苦しめる帝政を懲らしめ、ロシアに大変革を起こさせてくれるなら、大いに援助しようと思った。」と自叙伝に

書いている（以上、読売新聞取材班「検証 日露戦争」、中央公論社、二〇〇五年。正慶孝・藤原肇《対談》歴史角発掘（上）、『ニューリーダー』 二〇〇五年八月号、  
<http://www2.tba.t-com.ne.jp/dappan/fujiwara/article/nichiroo1.htm>）。

上述のように、フランスはロシアに好意的であったこともあり、フランスで発行された日露戦争関係の諷刺絵葉書は日本風刺にあふれている。その点については、『日仏絵はがきの語る100年前』図録に詳しい。なお、同書四二頁には「操り人形」と題する諷刺絵葉書が載せられているが、



『日仏絵はがきの語る100年前』に紹介された諷刺絵葉書

その解説に「同盟国ロシアの意外な苦戦を知ったフランス人の中には、日本の強さはイギリスの強力なアドバイス、

さらにはイギリスの指示通りに動く操り人形だからと考えるものが出てきた」とある。しかし、これはジャコブ・シフが資金提供して日本を操り、ポグロム（ユダヤ人迫害）をおこなうロシアを潰そうとしている図であろう。フランス人もジャコブ・シフがいなければ、日本は戦えなかったことを知っていたのである。

ジャコブ・シフを描いた諷刺絵葉書は、図録掲載のもの以外にも A. Foelamarre 作画のものや Stella Paris の一枚が所蔵されている。A. Foelamarre 作画のものは、「戦費国債」の袋を持つアメリカ人に丁寧な頭を下げる日本軍人の姿が描かれている。Stella Paris の一枚は、朝鮮というケーキを前にロシア軍人に睨みをきかせる「ドル」を下げたアメリカ人が描かれている（なお、掲載写真の隅の黒い斜線は、アルバムの差し込みである。急ぎ撮影したものである）。

絵葉書作家としては、清水勲氏が紹介されたように『日仏絵はがきの語る一〇〇年前』、Ovens' Myrta' B.LAVIGNE' R.THOMEN' E.Muller' LaFleche' Goubert' Fralicy' A.Molynk' F.Maymonier' ROSTRO などの署名が知られるが、「Stella Paris」と書かれた絵葉書が三〇枚（ただし、枚数は暫定的な数であり、本格的調査によって変動することもある。以下、同じ）とまとめた数ある。Stella Paris は、梨本宮夫妻の滞在先は未

だ未確認であるが、ATEL STELLA PARIS ホテル・ステラの  
ことかと思われる。

これらの絵葉書には、  
刷り部数が記されている  
で、このコレクションに  
わかる」のである。

#### 4 戦役記念絵葉書



アメリカ人の頭を下げる日本軍人



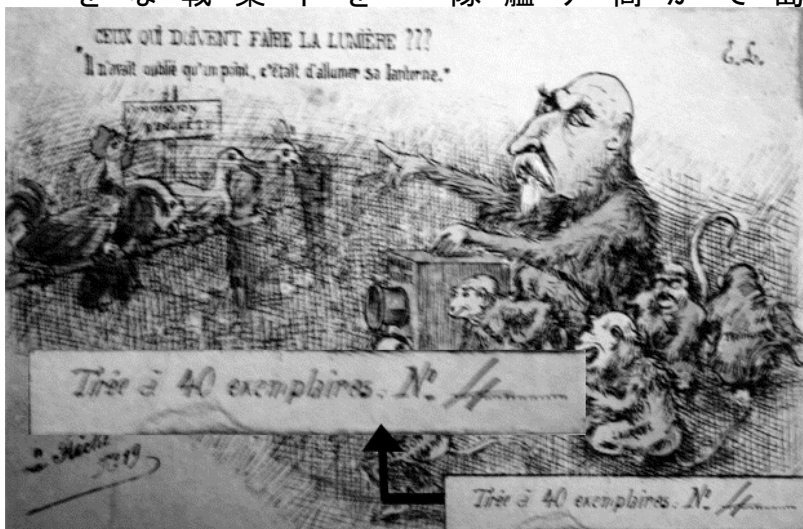
戦役記念絵葉書は約一二〇枚ほどを確認出来る。このうち、逓信省発行の戦役記念絵葉書については、向後恵里子氏の「逓信省発行日露戦役記念絵葉書―その実相と意義―」（『美術史研究』第四十一冊、一九九八年十二月）に詳しい。

陸地測量部の写真絵葉書が八枚。第二回凱旋歓迎会の写真絵葉書四枚。花電車や凱旋門の写真絵葉書などがあるほか、「三越謹製」とある絵葉書が五点確認できる。また、陸軍恤兵部が銀座上方屋に印刷させた切手不要のいわゆる「恤兵はがき」も四点ある。また、戦争画の絵葉書が二二枚あるが、説明書きのついた横版が四枚、説明書きの無い

縦版が十八枚である。縦版のものは多く、書き白を取っているかのように絵が上下いずれかに偏った描かれ方をしている。

また、蔚山沖大海戦二周年記念が二枚あるが、絵葉書の説明書も保存されている。蔚山沖大海戦は、明治三十七年（一九〇四年）八月十四日

に行われた、朝鮮半島南部、蔚山の沖合いでの海戦である。日本から朝鮮半島に至る通商路を脅していたロシアのウラジオストック艦隊を、日本の第二艦隊が破った海戦である。その他、軍艦に艦長を添えた写真絵葉書が十一枚、陸軍記念日絵葉書が五枚など、日露戦争関係だけでも、かなりいろいろな絵葉書を収集している。





ほかにはロシア人俘虜收容所の絵葉書が十一枚ある。松山大林寺、名古屋東西本願寺、静岡の各俘虜收容所の写真絵葉書

である。俘虜收容所は俘虜の増加とともに全国に設けられ、二九箇所にのぼった。俘虜收容所の絵葉書の作成に関しては、以下の資料が参考となる。

「大本営陸副臨第一九六号第一 一月二十三日 堀内副官ヨリ萩野第一軍参謀へ 松山俘虜收容所光景絵端書五十組 右本日小包郵便ヲ以テ及御送付候也」(JAGAR)アジア歴史資料センター) Ref. C06040699400 「明治38年1. 2月分 副臨号書類綴大本営陸軍副官」、防衛省防衛研究所。他にもJAGARに関連資料が多数みられるが、今は一通のみにとどめておく。(日本が捕虜をできるだけ厚遇した背景には、国際法の普及もあるが、日本が欧米と共通の文化的価値を有する国であることを理解させるための外交イメージ戦略であったかもしれない、との指摘が

ある(吹浦忠正『捕虜たちの日露戦争』、日本放送協会NHKブックス、二〇〇五年)。捕虜收容所絵葉書もそうした視点で解釈できよう。ただし、厚遇のかげに残虐行為が無かったわけではないことは、前掲書にみえる。

なお、松山の俘虜收容所については、近年、その概要はじめ実態についての詳細な研究が『マツヤマの記憶―日露戦争一〇〇年とロシア兵捕虜』(松山大学編、成文社、二〇〇四年)として公刊された。

さらには、海軍兵学校の写真絵葉書が七枚のほか、救護を描いたものが四枚みられる。写真絵葉書では、乃木大将や東郷大将の肖像絵葉書や乃木・ステッセル会谈記念の絵葉書などがあるが、白黒の乃木・ステッセル会谈

ロシア兵俘虜收容所絵葉



記念の絵葉書には各人の肩書き氏名が書き込まれている。筆者は東京堂発行の絵葉書で、これと全く同じものながら彩色したものを所有しているが、こちらは収集絵葉書にはみられない。

日露戦争関係の絵葉書が多いのは、夫守正王が従軍していたこともあるが、自らも赤十字活動に参与して慰問袋の作成や傷病兵慰問を積極的に行ったことにより、戦争が身近であったことにもよるのではなからうか。もっとも、伊都子妃殿下の戦争に関する情報とその感慨は一般人と何ら異なるところは無かったようである（小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記』）。

## 5 その他の絵葉書

風景絵葉書には、伊都子妃殿下の婚礼のときに親族が寄せ書きしたと思われる鍋島邸の写真絵葉書（小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記』十八頁に掲載）のほか、那須温泉や伊香保、二荒山神社など、各地の風景絵葉書がある。また、災害絵葉書では、明治四二年八月の江濃大地震の写真絵葉書が十枚ある。

江濃大地震は姉川大地震ともいい、マグニチュード六・

八とされる。滋賀県北東部の姉川付近を震源とし、滋賀県から福井県にのびる北北西走向の柳ヶ瀬断層の南端付近で発生した。この地震によって東北地方南部から九州地方の一部にかけての広い範囲で有感となり、被害は滋賀県と岐阜県に及んだ。震源付近で震度六、滋賀県内全域で震度四〜五といわれている。被害は、滋賀県で死者三名、負傷者六四三名、家屋全壊二一九二戸、家屋半壊五九八五戸（彦根地方気象台「滋賀県の地震」<http://www.osaka-jma.go.jp/hikone/bousai/zisin/higai.html>）。



絵葉書から被災後の生々しい様子を知ることが出来る。

ほかに、天皇をテーマとした絵葉書が十五枚あり、明治天皇の写真絵葉書が六葉、大正天皇の写真絵葉書が七葉な





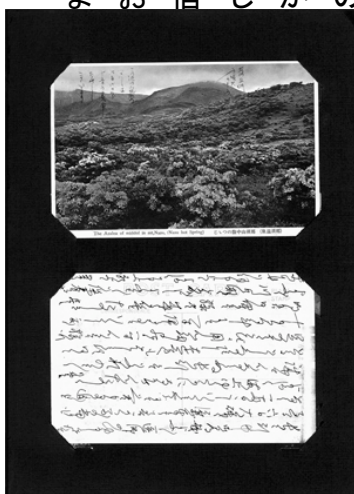
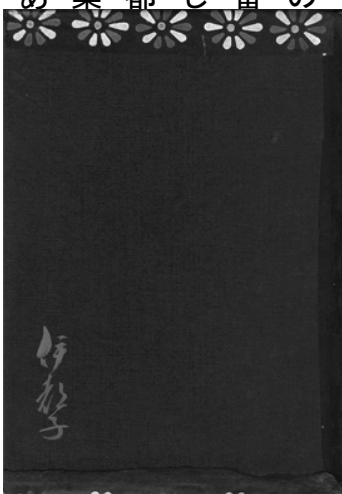
ど。明治三十三年、伊都子妃殿下十九歳のときに、皇太子だった大正天皇（嘉仁）が日光滞在中にしばしば鍋島別邸にやってきており（小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記』）、親近感を抱いていたものと思われる。

## 6 来信アルバム

伊都子妃殿下所蔵の来信アルバムは、手製のカバーが貼り付けられており、裏表紙裏に「伊都子」と朱書がある。昭和四年（一九二九）九月以降の来信絵葉書が来信順に整

理貼付されているようである。差し出し人は娘の規子や妹信子（松平恒雄夫人）、信子の娘で秩父宮妃殿下となった勢津子、規子の娘たち、母栄子、鍋島本家で甥の直泰の夫人紀久子（朝香宮鳩彦の娘）などが主で、身内からの来信を大切に保存している。何枚かには受信の月日が書き込まれており、伊都子妃殿下のこまめな様が窺われる。

手紙ではなく、絵葉書に私信を記しているものも多く、中には三葉に番号を付けて長々と書きしるしたこともある。伊都子妃殿下が絵葉書を収集していたことと関係があ



るのだろうか。また、切手を貼ったものはほとんど無く、賀状などは宮家の者が持参したというから（青梅きもの博物館副館鈴木啓三氏談話）、こうした私信も持参されたのであろうか。

これら絵葉書の絵画面は国内外の風景写真が主であるが、美人絵や昭和八年特別大演習観艦記念スタンプの捺された軍艦絵葉書などもある。

おわりに

伊都子妃殿下収集の絵葉書は、伊都子妃殿下が三代の天皇の時代を生き証であり、日露戦争関係の絵葉書をはじめ、当時の世相風俗をも伝える貴重なコレクションである。これからその全貌を本格的に調査するにあたって、その一部を紹介し、もって、その価値を再確認した。

また、来信絵葉書のもつ重要性にも触れたが、ほかにも娘たち（方子・規子）の作文なども收藏されており、あるいはこれまでに未公表の事実が明らかになるかもしれない。収集絵葉書からは伊都子妃殿下の関心とともに、当時のヨーロッパの日本観、あるいは日本の外国観を明らかにすることも可能であろう。

今後、青梅きもの博物館の御協力を得て、山田俊幸教授を中心とした調査を推進していくことになる。

〔付記〕この絵葉書の調査研究等は、平成二十年度帝塚山学院大学研究助成を受けたものであり、本稿はその成果の一部である。今回の予備調査に御協力いただいた、青梅きもの博物館副館長鈴木啓三氏、御子息雄三氏、ならびに早稲田大学非常勤講師増野恵子氏にこの場をおかりして謝意を表す。

本稿は『帝塚山学院大学 研究論集「文学部」』第43集（平成20年12月20日発行）に掲載したのだが、校正ミスによる誤植が多かったため、出来る限り誤植を訂正したものである。（二〇〇九年八月一日）